

アポイ岳ジオパーク 世界ジオパーク国内候補地審査 現地審査報告書

【日程】2014（平成26年）7月1日（火）～3日（木）

【審査員】

成田賢（全国地質調査業協会連合会会長・日本ジオパーク委員会委員）
竹之内耕（糸魚川ジオパーク）
柚洞一央（室戸ジオパーク）

【主な現地対応者】（推進協議会＝様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会）

坂下 一幸 推進協議会会長、様似町長
小嶋 仁 推進協議会副会長、様似町教育委員会教育委員長
谷村 利幸 推進協議会副会長・アポイ岳ファンクラブ会長、認定ガイド
泉 誠 推進協議会副会長、冬島自治会長、昆布漁家
工藤 仁 推進協議会理事、様似町商工会長、マルサン工藤商店
小林 弥生 推進協議会理事、様似町社会教育委員副委員長、認定ガイド
久野 俊昭 推進協議会理事、様似町観光協会会長、(有)久野漁業
酒井 健二 推進協議会会員、様似町議会議長、酒井運送(株)
高谷 晶美 推進協議会会員、様似町教育委員会教育長
菊地 修二 推進協議会会員、様似アイヌ協会会長
新井田清信 推進協議会学術顧問、様似町議会議長
水野 洋一 アポイ岳ファンクラブ理事、認定ガイド
信太 富夫 アポイ岳ファンクラブ理事、認定ガイド
伊與木一男 アポイ岳ファンクラブ理事、認定ガイド
熊谷 カネ 様似民族文化保存会会長
大野 徹人 アイヌ生活相談員、様似民族文化保存会
高橋 敦 新日本電工(株)日高工場事務課長
大久保知行 等澗院住職
バーローズ・アリソン 様似町教育委員会英語指導助手
三国 昭博 アポイ山荘支配人
川崎 正春 様似町商工会事務局長
下條登喜夫 (有)花薬水産代表取締役
笹嶋 ひとみ 様似観光案内所ガイド
佐々木 泰 推進協議会事務局長、様似町商工観光課長
田中 正人 推進協議会事務局員、様似町商工観光課主幹（アポイ岳保全担当）
原田 卓見 推進協議会事務局員、様似町商工観光課主幹（ジオパーク担当）
児玉 正敏 推進協議会事務局員、様似町商工観光課ジオパーク推進係長

坂下 志朗 推進協議会事務局員、様似町商工観光課アポイ岳保全係長
加藤 聡美 推進協議会事務局員、様似町商工観光課アポイ岳保全係学芸員補
杉本 記史 様似町産業課長
荒木 輝明 様似町教育委員会生涯学習課長
川口 達也 様似町教育委員会生涯学習課長補佐
田村 裕之 推進協議会事務局員、様似町教育委員会生涯学習課社会教育係長
ジオ塾生 12名

【見学内容】

北海道アイヌ協会様似支部（様似民族文化保存会によるアイヌ伝統文化活動）、様似海岸エリア（エンルム岬・観音山・等澗院・様小裏の旧採石場・岡田のチセ・海産物販売店・様似郷土館・様似観光案内所）、日高耶馬溪エリア（冬島の穴岩・日高主衝上断層・大正トンネル・角閃岩の褶曲・和助地蔵尊・昆布漁師作業場）、幌満峡エリア（幌満川第二発電所・幌満峡泉橋）、アポイ岳地質研究所（ジオラボ）、アポイ岳ジオパークビジターセンター、アポイ岳調査研究支援センター、ほか

【現地審査のまとめ】

アポイ岳ジオパークは日本ジオパークに 2009 年に認定されて以来、拠点施設の整備や看板整備などの「ジオパークの見せ方の工夫」、地域住民を対象にした講座「ふるさとジオ学」の取り組み等の「普及活動」、研究者向けの調査研究サポートとしての宿泊施設運営やジオラボの整備といった「研究推進」など、この 5 年で魅力ある素晴らしいジオパークに育ってきた。また、近年では、世界ジオパーク認定を目指して、様似町役場を中心にさまざまな新たな取り組みを行っている。昨年の世界ジオパーク国内候補地見送りの結果を踏まえても、この一年間で課題解決に向けて前向きな取り組みをおこなっており、ジオパークとしての充実度は年々上がっていると評価できる。今回の現地審査では、特にこの一年の取り組みを審査した。以下は、主にこの一年間の取り組みについての講評であり、指摘である。

この一年間の新たな取り組みの中で、以下の 3 点とは特に高く評価できる。①ジオパークとしてアイヌ文化（アイヌの自然観）を積極的に取り上げる試みは、まだ始まったばかりという印象はあるものの評価に値する。アイヌ文化を積極的に取り上げることは先住民族を尊重する GGN の指針に見合うものであり、今後 GGN に対して積極的に成果を発信してほしい。②駐日オマーン・スルタン国大使館や一般社団法人日本・オマーン協会の後援を得ての講演会「幌満カンラン岩は世界的に見てなぜ重要か？～中東オマーンのカンラン岩との比較から～」を開催したことは、世界を意識した新たな取り組みとして評価できる。更に中央公民館に中東オマーンのカンラン岩と幌満カンラン岩を対比した展示を行い、訪問者の理解向上に努めていた。このような活動を通じて、GGN メンバーの中で存在感を示せるように、今後もグローバルスケールの取り組みを積極的に推進してほしい。

③地質的なコンテンツだけでなく、北前船や三官寺といった歴史的コンテンツ、コンブ漁という漁業産業の話をジオストーリーに取り入れようとしていることは、“大地の公園”としてのジオパークを目指すものとして評価に値する。

一方で、世界ジオパーク認定のために必要な外国語対応に関しては、より具体的で早急な対策が必要である。現状で外国人が少ないから様子を見て適宜対応という考えではなく、積極的に外国人を受け入れるといった考え方を持ってほしい。北海道のインバウンドツーリズムの現状を考慮すると、中国語や韓国語での対応も検討すべきではないだろうか。運営体制面では、自治体主体であり当事者意識を持って主体的に取り組む地域住民を増やす努力がまだ不十分という現状がある。今後、世界ジオパークに認定されたとしても地域住民を巻き込む継続的な努力が必要である。また、カンラン岩の採石産業と保全保護の問題に関しては、打開策を今後も継続的に模索してほしい。

1) ジオサイトと保全

アポイ岳ジオパークのメインコンテンツであるカンラン岩に関して、「持続的な開発」の思想を意識したあり方は今後も考える必要がある。地域一帯で安く手に入るから生活に取り入れられているということは、貴重性を主張することと相反する現状と認識される可能性が高い。今後長期的視点で、解決策を模索し続けてほしい。

2) 教育・研究活動

歴史学の専門員を採用する予定があるということは評価できるが、歴史学に限らず、より多様な学問的知見を取り入れて地域性を描き出してほしい。そういった活動を通して、ジオストーリーの一層の拡充を目指してほしい。また、学校教育での実践に関しては、教育委員会がカリキュラムの中にジオパーク学習を位置づけ、教員への支援を行うことが望ましい。教員がより主体的にジオパークを教材として取り上げる仕組みづくりに取り組んでほしい。

3) 管理組織・運営体制

町長を中心にして、世界ジオパーク認定を目指すという意気込みは感じられる。町議会も積極的にジオパークを理解する努力をしている点は評価できる。一方で、行政主導(ジオパーク推進協議会主導)という印象があるのも事実である。よりたくさんの地域住民の主体的な参画を模索するとともに、アポイ岳ジオパークにかかわる全ての構成員で情報を共有し、みんなでアポイ岳ジオパークの世界認定を通して地域をどうしたいのか、あるべきアポイ岳ジオパークの姿を今後も考え続けることが必要である。また、行政内部での関係機関との連携も、実効性のあるものに改善してほしい。

4) 地域の持続的発展とジオツーリズム

具体的なガイド養成講座として「新・ふるさとジオ塾」を開設するなど、ジオツーリズム推進に必要なガイドの育成に改善が見受けられる。今後も、ジオストーリーの拡充とともに、新たなジオツアーを企画する努力を継続してほしい。この一年で新たにアイヌ文化に関するサイトが増えるなど、ジオ

サイトの充実が見られるが、それぞれのサイトどうしの相関関係がわかるような工夫をもっとしてほしい。お客さんが受け入れやすいジオパークの楽しみ方を今後も模索する必要がある。

5) 国際対応及びネットワーク活動

国際対応としては、英語版のモバイル端末用アプリ作成やジオサイト看板への英語表記などが一部実施されているが、今後実際に外国人客が来た時の具体的な対応を整備していく必要がある。世界認定を受けると外国人の来訪も充分にありうる。より積極的な取り組みが必要である。北海道のインバウンドツーリズムの現状を考慮すると、中国語や韓国語での対応も検討する必要があるのではないか。また、ネットワークへ活動としては、今後は、G G Nメンバーに認定されることを見越して、世界のG G Nメンバーとパートナーシップ、姉妹提携を視野に入れた具体的な活動を模索してほしい。より積極的な活動を期待したい。また、プレートをテーマにした日本の他のジオパークとの連携など、日本国内のジオパーク間での連携も模索してほしい。

6) 防災・安全

各ジオサイトの安全管理として、立ち入り禁止範囲を明示し、ガイドの説明の中で落石の発生等に関する注意喚起されている点は評価できる。また、東日本大震災での津波来襲を受けて、ハザードマップを整備し、学校並びに地域の防災教育、来訪者への防災喚起を行っている点も評価できる。

一方、アイヌ民族も多くの自然災害を経験しているはずである。集落の配置などに防災の知恵があると考えられる。今後、この点に関する研究の進展とジオサイトとしての活用を期待したい。

7) 持続可能性について

様似町では、まちおこしとして従来型の産業誘致、娯楽施設開発といった手法から、ジオパークをメインにした訪問型、滞在型まちおこしを目指している。このために、ジオパーク活動を通じた町職員の意識改革に取り組み、徐々に成果を挙げている。ジオパーク商品としての地場産品開発、着ぐるみ（かんらん君・アポイちゃん）を使った宣伝活動等様々な工夫が見られる。この成果は、修学旅行等来訪者の増加に現れている。また、地域の子供が必ず登るアポイ登山においても、「ただ登る」から、岩石や動植物を観察しながら登るに変わったとの紹介があるなど、地域にジオパークが根付きだした状況が見られた。アポイ岳ジオパークの持続可能性は高まっていると評価できる。